

ルイ・パスツール大学に留学して

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

理学専攻 櫻井 宗良

2008年10月1日に日本を出発。なぜか航空会社がエアチャイナだったので北京で一度トランジットがありました。しかしながら機体の不具合により北京で足止め。シャルルドゴール空港への到着予定は午後6時。シャルルドゴール空港内にあるCROUS事務所でパリに一泊するホテルの詳細および、翌日にストラスブールに向かうためのTGVのチケットを頂くことになっているのに、夜遅くなるとCROUS事務所が閉まってしまうのではないかと焦るもののどれくらい待たねばならないのかといった情報がわからず初っ端からパニック状態。私の目の前にはどうやら中国観光ツアー帰りのフランス人のおじいちゃんおばあちゃんの団体が。さっぱり状況がつかめないで、思い切ってフランス語で彼らに状況を聞いてみると彼らも全く状況がわからずに困っているのだと優しく答えてくれました。パニックに陥っている私を見て不憫に思ってくれたのでしょうか、おばあちゃんがビスケットを勧めてくれて「フランスに何をしに行くの？どこから来たの？」と色々話をしてくれました。結局5時間北京で待つことになったのですが、フランス人のおじいちゃんおばあちゃんとの会話でリラックスでき、シャルルドゴール空港内のCROUS事務所の方も午後11時に到着したにも関わらずあたたかく迎え入れてくれ、無事にストラスブールまでたどり着くことができました。

ストラスブールに着くと研究室の方が車で迎えに来てくれており、到着したのがちょうどランチタイムだったので、早速、大学内の食堂で研究室の人たちとの昼食をとりました。私を迎え入れてくれた研究室のボスはロシア人。そのため研究室のメンバーもロシア人が多数。その他はイラン人、ポーランド人、メキシコ人、中国人。フランスにいながらフランス人のいない少し特殊な環境の研究室でした。研究室の主な研究テーマは白金微粒子についてです。次世代のエネルギー源として期待されている固体分子型燃料電池のカソード反応において白金は必須な触媒であるものの、希少価値が高くその上高価です。白金をバルクとは異なるユニークな性質をもつ微粒子にすることで白金触媒量の低減化を目指しています。研究室のメンバーはフランス語を話せる人はほとんどおらず、研究室内では英語が公用語。ゼミでは二週間に一度、自分の研究の近況報告をして皆で意見を交換し合う熱心な研究室です。研究において必要なことがあれば別の研究室の人であってもどんどん聞いて研究を進めていくというアグレッシブな姿勢は見習っていかなくてはいけないと刺激を受けました。学内の人、皆が仲間であるという意識が強く、すれ違う人がたとえ知らない人であっても「Bonjour.」と挨拶し、知り合いであれば「元気？最近研究は進んでる？」と気軽に声を掛け合うような気持よく研究できる環境でした。

昼食は昼食代を支払うプリペイドカードの関係でフランス語が公用語である隣の研究室

の人と食べることに。はじめのうちは言葉がわからず、窮屈に感じることもあり、何か聞かれると私はいつも日本語で「なに？」と答えてしまう程のフランス語アレルギーが出てしまいました。隣の研究室の人達はその響きが気に入ったようで、それ以来、彼らの中の私のニックネームは「なに」。私のごはんを食べるときにはいつも「いただきます」と言っていたらみんな真似をして「いただきます」と言うようになったり「盆栽」、「侍」、「アリガトウ」など知っている日本語を披露してくれたりフランス語を教えてくれつつ日本語にも興味を持ってくれ、多少言葉がわからないことがあっても気にすることなく楽しく昼食を食べるようになりました。学内では研究については英語、プライベートなことについてはフランス語を使うというバランスの良い生活を過ごしていました。

休日にはストラスブールやその近郊の町であるコルマールの散策に出かけました。コルマールは「ハウルの動く城」の舞台になった町というだけあり、のどかでとてもきれいな町でした。慣れてきた頃にはフランス国内にも出向くようになり、特に印象に残っているのはレンヌでのフランス人の友達の結婚披露宴です。アペリティフだけで一時間以上も時間をかけ、食事も家族で話しながらゆっくり食べる。フラン



ス人の生活を目の当たりにでき、貴重な経験となりました。その他、ドイツにいる友達に会いに行ってドイツビールを飲む、スイスにある温泉へ行きチーズフォンデュを食べるなど楽しい思い出が多くあります。

しかしながら、一人で海外で生活するというのは勿論楽しいことだけではなく、辛くなり落ち込むことも多々ありました。それでもこの留学を成し遂げることができたのは遠く離れた日本から応援して頂いた先生および友人、両親、様々な局面で出会った方の支えがあったからだ実感しています。普段、自分が恵まれた環境にいることに改めて気付く良い機会にもなりました。

この留学を通して自分が体験したことや感じたことを反映し、さらに充実した研究生生活を送ることができればと思っています。

最後に日仏理工科会のご支援、また湯浅年子記念特別研究員、そして 2008-9 フランス政府給費生としてこのような機会を与えてくださった先生方にこの場をお借りして深く感謝致します。